

常に流動的な“host-parasite relationship”に 対処していくための社会貢献



やまざき しゅうどう
山崎 修道

国立感染症研究所 名誉所員

略歴 **山崎 修道** (やまざき しゅうどう)

- 1961年 千葉大学医学部医学科 卒業
- 1966年 千葉大学大学院修了, 同医学部文部教官
- 1967年 米国バージニア大学医学部 客員研究員
- 1970年 米国National Institute of Health 客員研究員
- 1972年 国立予防衛生研究所ウイルス中央検査部 室長
- 1975年 米国ニューヨーク大学医学部 客員助教授
- 1981年 国立予防衛生研究所ウイルス中央検査部 部長
- 1991年 同副所長兼エイズ研究センター長
- 1993~1999年 同所長 (1997年に国立感染症研究所に改称)
- 2001~2007年 三菱化学ビーシーエル (現: 三菱化学メディエンス) 顧問
- 2004年~ NPO 法人エイズワクチン開発協会設立, 同理事長
- 2009年~ 財団法人日本ポリオ研究所 理事長
- 現在に至る

感染症分野の危機対応の時代に

メディエンス FORUM は 2003 年に MBC FORUM として始まり, 私は第 1 回から第 5 回までの代表世話人を務めました. 当時の時代背景として注目すべきことは, 1960~70 年代にかけてアフリカに突如発生した恐怖のウイルス性出血熱に続いて, 1980 年代に世界を震撼させた牛海綿状脳症 (BSE) の発生, 1981 年にアメリカで発見された後たちまち世界中で確認されたエイズ, 1997 年に香港で発見された高病原性鳥インフルエンザウイルスのトリからヒトへの直接感染, 1999 年にニューヨーク市に突如出現したウエストナイルウイルス熱, そして 2002 年に中国で新たに発見された重症急性呼吸器症候群 (SARS) 等々, 地球上のどこかで次々と発生したいわゆる新興・再興感染症のグローバリゼーションのリスクから, いかにして国民を守るかが 20 世紀末から 21 世紀にかけての社会の重要な関心事でした. このような時代背景のさなかにあった 2003 年, 当時の社長からの依頼で MBC FORUM の企画をお手伝いすることとなりました.

幅広い分野に関係する情報を発信する

そこで第 1 回から第 5 回までは“感染症 FORUM”として時の話題の感染症を中心とした内容を取りあげました. 地球環境の変化による新興・再興感染症が台頭してきた時期にあって, 民間検査会社の“社会貢献”としてどのような内容がふさわしいか議論を重ねた結果です. 内容の企画を立てるにあたっては世話人を誰にお願いするかが非常に重要で, 感染症分野から 14 名の方を候補とし, 最終的に 13 名の方にお引き受けいただくことができました. テーマの決定について事務局の方々からは, この FORUM は必ずしも営利に結びつく必要はないという言葉が繰り返

10年を振り返って

講演 1

講演 2

講演 3

講演を
絞って

語句解説

FORUM 開催
事務局後記

最新
トピックス

連載
ダイエット

検査と私

医の提言

徒然なる
ままに。

し出てきました。つまり、必ずしも検査技術に関係した情報だけではなく、医療、健康、福祉といった広い分野に関係する情報を社会に発信することが民間検査会社の責務である、というのです。その意義があったことは、FORUMが10年間盛況であったという点で証明されていると考えます。

本誌 Animus が FORUM に果たした役割も大きいと思います。1996年に創刊され現在まで16年間季刊誌として発刊が続いているわけですが、本誌があったからこそ、FORUMを10年もの長きにわたって継続し得たと思っています。本誌の特集を初号から追っていくと非常に面白く、初めは糖尿病や高血圧、がんといった内容が多いのですが、2001年ごろからは感染症分野の特集が多くなっています。このことはFORUMのテーマである感染症に対する世の中の関心の高まりを表しているのではないのでしょうか。

社会貢献の精神は変わらず

さて、最近のFORUMですが、内容が専門化し、技術的な言葉が多くなってきている印象を受けます。技術が進んだために自然と専門化しているのか、社会の要求によるものなのか、どちらかなのでしょうか。注意したいのは、科学技術が進歩し専門化するほど、一般の人の理解から離れて、溝ができてしまうということです。学術的な学会でこそ専門的な内容が求められますが、そこに「社会に広く知ってもらおう」点が求められることは少ないのではないのでしょうか。私は、FORUMに求められている役割はやはり、いかに社会に分かりやすく伝えるかという点ではないかと考えます。例えば、薬剤耐性菌や高病原性鳥インフルエンザに関しても、世の中に正確でない情報や科学的根拠のない情報が伝えられることがあります。そういった誤りを正していくこと、一般の人にわかりやすく正確な情報を伝えることもFORUMの役割の1つ

であると考えます。それは専門家に話すよりも難しいことで、しかもそれができる先生を見つけるのは容易なことではありません。

民間検査会社の主要な役割は以前は病気の検査に限られていたように思いますが、現在ではワクチンや新薬の臨床試験なども手掛けるようになってきました。ジェンナーの時代に重要だったことは、最も悲惨な天然痘がなくなることであり、ワクチンのもたらす大きな恩恵のためには副反応はある程度止むを得ないと考えられていました。しかし現在では安全性に対する社会の要求が強くなっており、何百万人に1人の副反応があっても問題となる時代です。これは人間が進歩していることの証であって悪いことではありません。この安全性を保証するために行うのが臨床試験であり、大きな民間検査会社だからこそできることなのです。ですから、民間検査会社の貢献する分野は今後ますます広がっていくと考えます。

目に見えない微生物と人間との関わり、つまり“host-parasite relationship”は科学技術の進歩と同時に人間がもたらした地球環境の変化により常に流動的です。それに対処していくためには、専門家の知識だけでなく、一般の人の理解も必要です。一般の人に理解していただくための啓発活動は専門家集団である学会ではなかなかできないことであり、民間検査会社がスポンサーとなって行う社会貢献活動だからこそできるものと思います。この“社会貢献”という第1回からのFORUMの精神は、歴代の社長によっても受け継がれています。これは非常に素晴らしいことであり、FORUMは三菱化学メディエンスが誇るべき事業だと思えます。

最後に、これまで10回のFORUMの開催を成功に導いていただいた、世話人の先生方や学術部を中心とした事務局などの、記録には残っていない多くの方々の尽力と苦勞に感謝を申し上げます。

10年を振り返って

講演 1

講演 2

講演 3

講演を終えて

語句解説

FORUM開催事務局後記

最新トピックス

連載ダイエット

検査と私

医の提言

徒然なるままに。

第1回から第10回まですべて、医療従事者に 資することができたと自負する



い が り じゅん
猪狩 淳
順天堂大学 名誉教授

略歴 猪狩 淳 (いがり じゅん)

1964年 順天堂大学医学部 卒業
1965年 順天堂大学医学部 臨床病理学講座入局
1985年 琉球大学医学部 保健学科臨床病理学 教授
1991年 順天堂大学医学部 臨床病理学 教授
順天堂大学医学部附属順天堂医院 臨床検査部長
2001～2005年 順天堂大学医学部附属浦安病院 院長
(現・順天堂浦安病院)
2004年 順天堂大学 名誉教授
2006年 三菱化学ピーシーエル (現・三菱化学メディエンス)
顧問
現在に至る

メディエンス FORUM は、2003年に第1回が開催されて以来、本年2012年6月で節目の第10回が開催されるに至りました。これにあたり、本誌 Animus の企画・編集室より「FORUMの10年を振り返って」と題して、私のコメントを求められたので、以下、思いつくままにこの10年を振り返ってみることにします。

FORUMのテーマの企画、立案は世話人会が行います。世話人会は、感染症および抗菌化学療法の基礎医学、臨床医学の専門家で構成され、その年のFORUMごとに、メインテーマとそれに関連の深い2～3のテーマを挙げ、それぞれの講演者を決定し依頼します。過去10回のテーマを見てみると分かるように、当然、その時折ごとに、社会的に大きな話題となった感染症、医学的に注目された感染症が取り上げられています。話題となり、注目された感染症の病原微生物学、臨床医学、臨床検査学、疫学、予防医学など、世話人会で十分に検討し、討議し、それにふさわしい講演者に依頼して決定することになります。

私は、このFORUMには2008年の第6回から代表世話人として世話人会に参画しました。以下、第6回以降のテーマと講演について列举してみます。

第6回 診断・治療に苦慮する感染症

- 講演1 「薬剤耐性肺炎球菌感染症の現状と対策」
岩田敏 先生
- 講演2 「変貌する淋菌感染症」松本哲朗 先生
- 講演3 「わが国において麻疹の排除 (elimination) は可能か」岡部信彦 先生

このFORUMでは、医学的に注目された感染症のうち、ペニシリン耐性肺炎球菌感染症と淋菌感染症を取り上げました。さらに社会的に問題となり、マ

スコミなどで大きく報じられた、「はしか(麻疹)」を取り上げました。

第7回 感染症診断・治療へのアプローチ

<第1部 咳>

- 講演1 「咳と感染症を考える」岩田敏 先生
- 講演2 「百日咳を考える」岡田賢司 先生

<第2部 ペット感染>

- 講演3 「ペットからうつる感染症」兼島孝 先生

第8回 地球環境と感染症

- 講演1 「自然環境と深在性真菌症
— 地域流行型真菌症も含めて—」
大野秀明 先生
- 講演2 「蚊など昆虫が運ぶウイルス感染症
— 日本脳炎, デング熱を中心に—」
森田公一 先生
- 講演3 「新型インフルエンザ — 動向と今後の対策—」
安井良則 先生

第9回 「多剤耐性グラム陰性桿菌感染症を考える — 忍び寄る脅威・多剤耐性菌—」

- 講演1 「多剤耐性菌の現状について」荒川宜親 先生
- 講演2 「早期検出について」石井良和 先生
- 講演3 「院内での対応について」大塚喜人 先生
- 講演4 「施設内感染対策の実際
— 多剤耐性アシネトバクターを中心に—」
高田徹 先生

2008年頃から多剤耐性 *Acinetobacter baumannii* 感染症が病院感染症の起炎菌として報告され、社会的に問題となりました。これを機に、次々と報告される多剤耐性菌について、その現状、迅速検出法、病院内での感染症発生・伝播防止および施設内感染対策などについて改めて考えてみることは重要か

つ意義のあることであるという意見が世話人会で提案され、第9回(2011年)の企画となりました。このFORUMは、臨床医、看護師、臨床検査技師はもとより、コメディカルの病院管理者、事務員に至るまで大きなインパクトを与えたと思っています。

第10回 微生物検査の将来展望

- 講演1 「病原真菌の新分類が検査分野にもたらすインパクト
— 病原真菌の分類・同定はなぜ難しいのか?—」
杉田隆 先生
- 講演2 「臨床微生物検査の今後の展望
— 三大技術革新と患者診療への貢献—」
大楠清文 先生
- 講演3 「検査データを利用した院内感染対策
サーベイランスシステムの実用化
— 自施設の感染対策を評価する—」
鈴木里和 先生

感染症に特化したFORUMの最終回として、これまで取り上げてきた感染症を中心としたテーマから離れ、視点を微生物検査に向け、今後の微生物検査はいかなる方向に進んでいくのであろうかという、現在、感染症学会、臨床微生物学会で注目されている話題をテーマにしました。微生物検査の技術革新や将来の展望が浮き彫りになったと思います。また、日常の検査データをフルに活用し、感染対策に役立たせる新しい試みは、今後の感染対策に応用できることを示唆するものでした。

*

以上、第6回から第10回のFORUMについて概観しました。第1回からのテーマはいずれも、特に医療現場のメディカル、コメディカルの方々に資することができたと自負しており、このFORUMの果たした役割は大きいと考えております。

10年を振り返って

講演1

講演2

講演3

講演を終えて

語句解説

FORUM開催事務局後記

最新トピックス

連載ダイエット

検査と私

医の提言

徒然なるままに。